

腹腔内遊離ガス像を認めた急性気腫性胆嚢炎の1例

いた くら よし ゆき¹⁾ か がわ こう じ¹⁾ やま もと よし たか¹⁾
 板 倉 由 幸¹⁾ 香 川 幸 司¹⁾ 山 本 悦 孝¹⁾
 やま した のり つぐ¹⁾ かく た えり な¹⁾ はな おか たく や¹⁾
 山 下 詔 嗣¹⁾ 角 田 恵理奈¹⁾ 花 岡 拓 哉¹⁾
 さね どう ひろ み¹⁾ ふじ さわ とも お¹⁾ ち ぬき だい すけ¹⁾
 實 藤 宏 美¹⁾ 藤 澤 智 雄¹⁾ 千 貫 大 介¹⁾
 くし やま よし のり¹⁾ うち だ やすし¹⁾ は り よう こ²⁾
 串 山 義 則¹⁾ 内 田 靖¹⁾ 波 里 瑤 子²⁾
 み うら ひろ し³⁾
 三 浦 弘 資³⁾

キーワード：急性気腫性胆嚢炎，腹腔内遊離ガス，ガス産生菌

要 旨

気腫性胆嚢炎はガス産生菌によって生じる稀な疾患である。症例は72歳男性，腹痛を主訴に受診。既往歴に糖尿病，高血圧，胃癌（胃切除術）あり。診察上，腹部は膨隆，腸雑音は減弱，圧痛，筋性防御を認めた。CTにて胆嚢周囲，胆嚢壁内にガスを認め，胆嚢内にも一部ガス像が認められた。さらに右上腹部，十二指腸近傍に遊離ガスを認めた。気腫性胆嚢炎の胆嚢穿孔もしくは消化管穿孔として緊急手術を施行した。しかし術中穿孔部位を認めず，胆嚢は壊死性変化を認め胆嚢摘出術を行った。気腫性胆嚢炎は糖尿病，高血圧などの既存の血管病変に起因する阻血性変化や胃切除後の胃十二指腸靱帯の血流障害により胆嚢粘膜の感染防御機構が破綻し，そこにガス産生菌が感染し発症すると考えられている。自験例では感染後産生されたガスが胆嚢壁に留まらず，胆嚢内腔，胆嚢周囲に波及し，胆嚢壁から滲み出すように腹腔内に漏出し遊離ガス像を呈したと考えられた。

はじめに

気腫性胆嚢炎はガス産生菌によって生じる稀な疾患で，急性胆嚢炎の一亜型である。本疾患は炎症が急激に進行するため，胆嚢壁の壊死や穿孔を来とし重篤化する場合がある。今回，我々は胆嚢

穿孔を伴わずに腹腔内遊離ガス像を認め，消化管穿孔と鑑別を要した急性気腫性胆嚢炎の1例を経験した。若干の文献的考察を加え報告する。

症 例

症例：72歳，男性。主訴：腹痛。既往歴：糖尿病，高血圧，胃癌（胃切除術）。家族歴：特記事項なし。生活歴：喫煙歴なし。飲酒歴なし。現病歴：入院5日前より腹痛が出現し，症状が軽快しない

Yoshiyuki ITAKURA et al.

1) 松江赤十字病院消化器内科 2) 同 外科 3) 同 病理部
 連絡先：〒690-8506 島根県松江市母衣町200番地